オランダ商館長の江戸参府と駕の浦

矢田 純子

はじめに

駕の浦は瀬戸内海のほぼ中央、現在の広島県福山市南部、瀬戸内海の先端に位置する。付近一帯が駕の浦（以前は駕、駕津）と呼ばれ、景勝の地として知られている。古くから潮待ち、風待ちの港として多くの船が行きかい、近世においては福山藩の領内産物を積み出すなど物資の集散地として繁栄した港町であった。また、朝鮮通信使や琉球使節、オランダ商館長一行が江戸との往復の際に、寄港した町の一つであった。

駕と外国人使節に関する研究は、『福山市史』[1]において朝鮮通信使、琉球使節、オランダ商館長一行それぞれについて概略が述べられている。また、福山市駕の浦歴史民俗資料館友の会による「朝鮮通信使と福山藩・駕の津」や、同館での琉球使節やオランダ商館長江戸参府の特別展の展示や図録においても、各使節の駕の浦滞在について詳細な研究がなされている[2]

本稿では安永三年（1774）と文政九年（1826）の江戸参府におけるオランダ商館長一行の駕の浦滞在を取り上げる。特に文政九年の駕への寄港は、同地で酒屋を営んでいた中村家に伝えられた「中村家日記」に詳しく述べられ、また商館長に随行したシーポルトの記録も有名である。そのため、これらを素材とした研究が存在するものの、商館長一行が来港した事実やシーポルトの行動が重視されるにとどまっている。そこまで以下では、それぞれの史料を再検討し、オランダ人から見た港町、駕の浦から見たオランダ人について明らかにする

とともに、寄港一件から浮かび上がる駕の町の構造について論点を提示していくことになる。

以下ではまず、朝鮮通信使や琉球使節、オランダ商館長一行のそれぞれの使節について触れることで、オランダ商館長江戸参府の際の駕の記録を紹介する。そして、安永三年と文政九年の商館長一行の駕の浦滞在を検討していく。

なお、日付について、西暦、和暦双方が出てくるため、原則として史料の記述に基づいて、後に括弧で対照年月日を記した。西暦を示す場合は算用数字を、和暦の場合には漢数字を用いることにする。

第1章 駕の浦と外国人使節

(1) 朝鮮通信使

朝鮮通信使は朝鮮国王が修好や慶賀の名目で派遣され、江戸時代には慶長十二年（1607）から文化八年（1811）まですべて回派遣され、江戸での聘礼は明治元年（1764）が最後である[3]。通信使は漢城（ソウル）、釜山を経て、対馬に渡り、相ノ島、下関、上関、下蒲刈、駕、牛窓、室津、兵庫、大坂、京都、彦根、大垣、名古屋、静岡、箱根、江戸、日光で、復路はその反対の経路をたどり、期間は8ヶ月から1年に及ぶものであった。

通信使一行は400〜500人の人数で構成されており、正徳元年（1711）の例をみると正使・副使・従事各1名、上々官3名、製造官1名、上判事3人、上官32名、次官13名、中官160名、下官260名の合計475名、これに案内役や対馬宗氏一行が
加わり、相当な規模であったことが窺える。
接待役は福山藩が務めていたが、寛延元年(1748)は藩主阿部正福が大坂城代を務めていたため、宇和島藩藩主伊達大膳大夫が接待の任にあたった。また、宝暦十三年(1763)には藩主阿部正右が京都所司代の職にあったことから、豊後国岡藩中川修理大夫が接待役を仰せつかっている。

朝鮮通信使の鵠の浦における宿所は絶景の地に建つ福禅寺の東側にある客殿で、福山藩主水野勝種が元禄三年(1690)に建立したものである。正徳元年(1711)の通信使一行から「日東第一行勝」と評価され、また寛延元年(1748)に正使・洪啓禧が「対櫻楼」と命名した。この施設に宿泊したのは正使をはじめ数名のみであり、他の一行は鵠の町内にある寺や商家に宿泊していた。例えば、天和二年(1681)には福禅寺に6名、御茶屋に57名、阿弥陀寺140名、南禅坊20名、東小屋261名、商家には猫屋、肥後屋、阿波屋、表屋、土佐屋、小代屋、石崎屋、大坂屋など数名ずつが滞在している。延享五年(1748)の商家への宿割をみると、先の大坂屋、土佐屋、猫屋に加えて、安田屋、吉浜屋、正月屋他13軒に及んでいる。さらに宝暦十三年(1763)には阿弥陀寺を使用したといわれている。

(2) やくにを訪れた琉球使節
琉球使節は琉国国王の使者で、幕府の将軍襲職を祝うため(慶賀使)、あるいは琉国国王が襲封したことに感謝の意を示すため（感謝使）に派遣された。両者とも寛永十年(1634)を第1回とし、前者は天保十三年(1842)まで、後者は嘉永三年(1880)までそれぞれ10回行われる。慶賀使、感謝使が同時に派遣されることもあり、江戸時代には18回を数えた。
一航は100人前後で、感謝使と慶賀使が同時に派遣される場合には170人ほどになり、鹿児島藩が送迎にあたり、幕府公船としての取り扱いを受け、天候次第では鵠に寄港していた。寛政二年(1790)には「十月十三日夜参府之琉球人石井町沖江滞船、薩州間屋港屋清助方江上陸。尤琉球人老人病死いたし候二付、翌十四日早朝小松寺江琉球人參詣土葬二取置候。」と、琉球使節の一人が病気のために亡くなり、小松寺に埋葬されている。そして寛政九年(1797)には「二月三日夜琉球人着船。翌四日早朝小松寺江仏參、夫より直二乗舟出帆いたし候」および、墓参りのために行き渡しんでいる。
琉球使節一行の宿所は薩州間屋の猫屋であり、嘉永四年(1851)には正使が中村家別邸朝宗寺に宿泊したとされる。

(3) オランダ商館長一行
(1) 参府の概要
江戸参府は、オランダ商館長が江戸へ行き将軍に拝謁し、献上品を送ることで、寛永十年(1633)以来恒例となる。寛文元年(1661)以降、旧暦正月に長崎を出発し、三月朔日前後に拝謁するよう改められ、寛政二年(1790)からは4年に1回となり、嘉永三年(1850)が最後の参府となる。
参府の経路を述べると、当初は長崎から平戸を経由し海路下関に向かっていたが、万治二年(1659)以降、長崎から小倉までは陸路となり、小倉から下関、下関から兵庫は海路で、兵庫－大坂から陸路で江戸へ向かっていた。下関から兵庫は順風であると約8日間を要した(第1図)。なお経路はその年により多少の変動がある。
参府旅行全体には平均90日前後を要し、江戸には2、3週間滞在していた。旅行の最長記録は以下で取り上げる文政九年(1826)の事例で、商館長スチュールレル一行が143日間をかけて参府旅行を行った。
また、小倉では大坂屋善五郎、下関では伊藤奨之丞、佐甲三郎右衛門（隔年交代）、大坂では長崎屋五郎兵衛、京都で海老屋余右衛門、江戸においては長崎屋源右衛門というように、5つの都市には定宿が存在していた。
【第1図】江戸参府行程図

*年度により若干の変更有り。
(ii) 参府行程
参府の行程を、船の滞在（停泊）を確認できる年度4回を取り上げ、【第1表】にまとめた。これを見ると、定宿がある都市（小倉、下関、大阪、京都、江戸）には必ず立ち寄り、下関、大阪、京都には数日間滞在していることがわかる（【第2表】）。その他の場所では休憩や宿泊など最低限の滞在にとどまっている。定宿がない町では予め上陸するところが届かれ、その目的は「寺社井町中見物」とされていたという(9)。

オランダ商館長一行が江戸との往復の際に、船の浦に滞在（町に上陸）することは数少ないといえる。たいていは通過しているが、時には投錦して風待ち、潮待ちする様子が見受けられる。江戸参府が恒例となった寛永十年（1633）以降では全167回の参府中、滞在・上陸は数回しか確認できていない。

第2章 オランダ商館長の船の浦滞在
(1) 参府記録に見る船の浦
江戸参府が恒例となる以前を含めて、外国人による記録のなかで船に関する記述を挙げると【第3表】の通りとなる。

毎回の参府の記録で船が出てくるわけではないが、船に滞在した際には多少なりとも触れられており、また上陸せず、通過するだけであっても以下のように記されることもある。

ここで元禄四年（1691）商館長バイテンハムの参府に随行したカンペルの記録を取り上げることとした（後編は筆者による。以下同）(10)。

（前略）間もなく航路からそれほど遠くない左手の、備後の国のゆやかにほのぼる山地を背にした海浜に、有名な船の港と町があっ
た。それゆえ、同じ名前の他の場所と区別するために備後の船と呼ばれている。湾曲した入江に沿った長い通りには、みすぼらしくはない数数の家があり、そのほかにマリアム（Mariam）すなわち遊郭と二つの美しい寺院がある。ここでは床に敷く大変上質の畳表を産出し、他国に送り出している。この町の後ろの斜面には、清銅な尼寺があり、そこから四分の一ドイツにマイル行くと、仏を安置した有名な阿武坐観音堂があり、人々はいろいろな病気をなおし、しかも特に船乗りに順風を恵むすぐれた力を、この仏の御利益だと思っている。それゆえ船乗りや旅客は何枚かの小銭を大きい板の上にしっかりとくくりつけて海中に投げ、彼らがそう呼んでいる阿武坐観音様に、よい風が吹くようにお供え物を贈るのである。こうしたお供え物は、その都度流れていく、彼らの願いがかなうので、とは言っても堂守はそれをもっと確実にするために、風の静かなときに、航行している船のそばに自分の小舟で出かけていて、観音様のために油の寄進を頼むのが普通である。この部落の前方や付近にある島や周囲の山地には、薮や樹木が大へんよく生い茂っていた。

これは1691年2月21日（一月二四日）往路での記録である。史料では船の南側の港や町並と「阿武坐（阿伏鬼）観音堂」について述べられている。これは船から西に4kmほど離れた阿伏鬼峠の先端に位置する盤台寺の観音堂のことであり、そこからの眺望の良さで知られている（【第2図】参照）。

また、同年4月24日（三月二七日）復路における（前略）白石の西にある船に向って潜ぎ進み、西側の石を投げれば届く辺りに船を停めた。この船の町は、幾つかの寺のある破風丘があって、海からは美しく絵のように見えたが、近づくと娼家や漁師の家や他に粗末な家々があり、取るに足らず、きたならしかった。この町の町は東方の海の中に突き出た長い岩山の上にあるので、われわれはそこを回って南
### 第1表 江戸参府行

<table>
<thead>
<tr>
<th>年度</th>
<th>姓名</th>
<th>里</th>
<th>定期</th>
<th>遅延</th>
<th>行列</th>
<th>書式</th>
<th>使用状態</th>
<th>行列時</th>
<th>定期時</th>
<th>誠実</th>
<th>延長</th>
<th>書式状態</th>
<th>使用状態</th>
<th>行列時</th>
<th>定期時</th>
<th>誠実</th>
<th>延長</th>
<th>書式状態</th>
<th>使用状態</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1841年 (文政4年)</td>
<td>仕業</td>
<td>定期</td>
<td>遅延</td>
<td>行列</td>
<td>書式</td>
<td>使用状態</td>
<td>行列時</td>
<td>定期時</td>
<td>誠実</td>
<td>延長</td>
<td>書式状態</td>
<td>使用状態</td>
<td>行列時</td>
<td>定期時</td>
<td>誠実</td>
<td>延長</td>
<td>書式状態</td>
<td>使用状態</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>1774年 (安政3年)</td>
<td>仕業</td>
<td>定期</td>
<td>遅延</td>
<td>行列</td>
<td>書式</td>
<td>使用状態</td>
<td>行列時</td>
<td>定期時</td>
<td>誠実</td>
<td>延長</td>
<td>書式状態</td>
<td>使用状態</td>
<td>行列時</td>
<td>定期時</td>
<td>誠実</td>
<td>延長</td>
<td>書式状態</td>
<td>使用状態</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>1841年 (文化5・文政元年)</td>
<td>仕業</td>
<td>定期</td>
<td>遲延</td>
<td>行列</td>
<td>書式</td>
<td>使用状態</td>
<td>行列時</td>
<td>定期時</td>
<td>誠実</td>
<td>延長</td>
<td>書式状態</td>
<td>使用状態</td>
<td>行列時</td>
<td>定期時</td>
<td>誠実</td>
<td>延長</td>
<td>書式状態</td>
<td>使用状態</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>1841年 (文政4年)</td>
<td>仕業</td>
<td>定期</td>
<td>遲延</td>
<td>行列</td>
<td>書式</td>
<td>使用状態</td>
<td>行列時</td>
<td>定期時</td>
<td>誠実</td>
<td>延長</td>
<td>書式状態</td>
<td>使用状態</td>
<td>行列時</td>
<td>定期時</td>
<td>誠実</td>
<td>延長</td>
<td>書式状態</td>
<td>使用状態</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

### 附 訳
エゲルベルト・ケンペル著・亀田信雄訳『江戸参府旅行記』平凡社、1977年、日編学会編『長崎オランダ商館日記』七年、雄松堂出版、1996年、フィリップ・フランツ・フォン・シーポルト著・亀田信雄訳『江戸参府旅行記』平凡社、1967年、東京大学史料編纂所写真帳598-2-62、7598-7-28、29、7598-7-43・44をもとに作成。
の入江に船を入れた。そこには私が見た日本
の庶民の家のうちではよい方の、立派な住宅
や蔵が長い列をなしてびしりと並んでいた。山の三分の一は耕地で、残りは険しく、すっ
かり蔵に覆われていた。その山の麓には美し
く照り映える堂や尼寺があった。夜ふけて順
風が吹き始めたので錨を上げ、日の出前に岩
城村の港で再び錨を落とした。（後略）
ケンペルは船には上陸していないので、恐らく
船上から観察して記したのであろう。史料からは、

[mapping]

【第2図】銚の浦関係略図

【第2表】各都市での滞在日数（日）

<table>
<thead>
<tr>
<th>年度</th>
<th>往・復</th>
<th>小倉</th>
<th>下関</th>
<th>萬屋</th>
<th>大阪</th>
<th>京都</th>
<th>江戸</th>
<th>備考</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1691</td>
<td>往</td>
<td>1</td>
<td>3</td>
<td>1</td>
<td>5</td>
<td>3</td>
<td>24</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>1691</td>
<td>復</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>?</td>
<td>5</td>
<td>19</td>
<td>鍋で遊覧</td>
</tr>
<tr>
<td>1818</td>
<td>往</td>
<td>1</td>
<td>12</td>
<td>1</td>
<td>4</td>
<td>5</td>
<td>23</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>1826</td>
<td>往</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>8</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>1826</td>
<td>復</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>7</td>
<td>7</td>
<td>39</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

【表1】をもとに作成。？は不明。1日は通過（宿泊無し）。

銚の港や町を往路の際よりも近くから眺めた様子
が観える。

さて、【第3図】は文化年間頃の銚の町並である。
元禄年間には港の南側に波止場はまだ存在してい
ないが、それを除くと町並はほぼ変わっていない。
ケンペルが「幾つかの寺のある険しい丘」として
いるのは、恐らく、医王寺、地蔵院、福正寺、そ
して園福寺のことであると考えられる。これらの
寺は現在も同じ場所にあり、南の海側から銚の町
を見渡すと、それぞれが小高い丘の上にあってひ
<table>
<thead>
<tr>
<th>西暦</th>
<th>和暦</th>
<th>抄録</th>
<th>往復</th>
<th>商館長</th>
<th>史料</th>
<th>頁</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>16350303</td>
<td>万永12年0114</td>
<td>牧を通過。</td>
<td>往路</td>
<td>ニコラース・クーケ・ペッケル</td>
<td>東京大学史料編纂所編『オランダ商館商売日記』(日本海外関係史料)</td>
<td>68</td>
</tr>
<tr>
<td>16350724</td>
<td>万永12年0611</td>
<td>牧、鰊釣を通過。</td>
<td>往路</td>
<td>ニコラース・クーケ・ペッケル</td>
<td>東京大学史料編纂所編『オランダ商館商売日記』(日本海外関係史料)</td>
<td>134</td>
</tr>
<tr>
<td>16380408</td>
<td>万永15年0224</td>
<td>牧に滞留。</td>
<td>往路</td>
<td>ニコラース・クーケ・ペッケル</td>
<td>『オランダ商館商売日記』訳文編之3上，1977</td>
<td>182</td>
</tr>
<tr>
<td>16411220</td>
<td>万永18年1118</td>
<td>牧に碇泊。</td>
<td>往路</td>
<td>ヤン・ファン・エルセック</td>
<td>『オランダ商館商売日記』訳文編之6，1987</td>
<td>27</td>
</tr>
<tr>
<td>16420226</td>
<td>万永19年0227</td>
<td>牧に到着。</td>
<td>往路</td>
<td>ヤン・ファン・エルセック</td>
<td>『オランダ商館商売日記』訳文編之6，1987</td>
<td>82</td>
</tr>
<tr>
<td>16421203</td>
<td>万永19年1012</td>
<td>牧を通過。</td>
<td>往路</td>
<td>ビーデル・アントニス・セール</td>
<td>『オランダ商館商売日記』訳文編之7，1991</td>
<td>11</td>
</tr>
<tr>
<td>16431115</td>
<td>安永20年1004</td>
<td>昨日の風に投錨，後に出航。</td>
<td>往路</td>
<td>ヤン・ファン・エルセック</td>
<td>『オランダ商館商売日記』訳文編之8上，1995</td>
<td>5</td>
</tr>
<tr>
<td>16440115</td>
<td>安永20年1206</td>
<td>牧に投錨。</td>
<td>往路</td>
<td>ヤン・ファン・エルセック</td>
<td>『オランダ商館商売日記』訳文編之8上，1995</td>
<td>103</td>
</tr>
<tr>
<td>16461211</td>
<td>正保3年1105</td>
<td>牧を通過。牧の周辺、往路</td>
<td>幾レム・フルス・テーヘン</td>
<td>『オランダ商館商売日記』訳文編之10，2005</td>
<td>57</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>16470218</td>
<td>正保4年0114</td>
<td>牧まで進む。</td>
<td>往路</td>
<td>ヘンリー・ファン・パイナンハム</td>
<td>『オランダ商館商売日記』訳文編之10，2005</td>
<td>138</td>
</tr>
<tr>
<td>16910221</td>
<td>元禄4年0214</td>
<td>牧の様子。</td>
<td>往路</td>
<td>エンゲルベルト・ケンペル（商館医）</td>
<td>東京大学史料編纂所編撰「江戸参府旅行記」</td>
<td>62</td>
</tr>
<tr>
<td>16910425</td>
<td>元禄4年0327</td>
<td>牧に投錨。</td>
<td>往路</td>
<td>エンゲルベルト・ケンペル（商館医）</td>
<td>東京大学史料編纂所編撰「江戸参府旅行記」</td>
<td>103</td>
</tr>
<tr>
<td>17440519</td>
<td>延享元年0408</td>
<td>牧を通過。</td>
<td>往路</td>
<td>ダフィット・ブルーリー</td>
<td>東京大学史料編纂所編撰「江戸参府旅行記」</td>
<td>234–235</td>
</tr>
<tr>
<td>17740514</td>
<td>安永3年0404</td>
<td>牧の座礁と牧への滞在。</td>
<td>往路</td>
<td>アレント・ヴィレム・フェイト</td>
<td>東京大学史料編纂所編撰「江戸参府旅行記」</td>
<td>7598–2–62</td>
</tr>
<tr>
<td>17740519</td>
<td>安永3年0405–09</td>
<td>牧に滞在。</td>
<td>往路</td>
<td>エンゲルベルト・ケンペル（商館医）</td>
<td>東京大学史料編纂所編撰「江戸参府旅行記」</td>
<td>7598–2–62</td>
</tr>
<tr>
<td>17940425</td>
<td>宽政6年0326</td>
<td>牧に入港？</td>
<td>往路</td>
<td>メーステル・ヘイスベルト・ヘーミ</td>
<td>東京大学史料編纂所編撰「江戸参府旅行記」</td>
<td>18–19</td>
</tr>
<tr>
<td>17940426</td>
<td>宽政6年0327（牧を）出港？</td>
<td>往路</td>
<td>ヘンドリック・ドゥフ</td>
<td>日隆学会編『長崎オランダ商館日記』</td>
<td>54</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>18140320</td>
<td>文化11年029</td>
<td>牧まで曳航される。</td>
<td>往路</td>
<td>エンゲルベルト・ケンペル（商館医）</td>
<td>日隆学会編『長崎オランダ商館日記』</td>
<td>57</td>
</tr>
<tr>
<td>18180306</td>
<td>文化15年0130</td>
<td>牧のリキュール酒。</td>
<td>往路</td>
<td>エンゲルベルト・ケンペル（商館医）</td>
<td>日隆学会編『長崎オランダ商館日記』</td>
<td>57</td>
</tr>
<tr>
<td>18180311</td>
<td>文化15年0205</td>
<td>牧に投錨。上陸。</td>
<td>往路</td>
<td>エンゲルベルト・ケンペル（商館医）</td>
<td>日隆学会編『長崎オランダ商館日記』</td>
<td>57</td>
</tr>
<tr>
<td>18220225</td>
<td>文政5年間0104</td>
<td>牧を通過。</td>
<td>往路</td>
<td>エンゲルベルト・ケンペル（商館医）</td>
<td>日隆学会編『長崎オランダ商館日記』</td>
<td>57</td>
</tr>
<tr>
<td>18260305</td>
<td>文政9年0127</td>
<td>牧</td>
<td>往路</td>
<td>ヨハン・ウィルヘルム・ドスタールレル</td>
<td>東京大学史料編纂所編撰「江戸参府旅行記」</td>
<td>119–120</td>
</tr>
<tr>
<td>18260305</td>
<td>文政9年0127</td>
<td>牧の様子。</td>
<td>往路</td>
<td>ヨハン・ウィルヘルム・ドスタールレル</td>
<td>東京大学史料編纂所編撰「江戸参府旅行記」</td>
<td>119–120</td>
</tr>
<tr>
<td>18260306</td>
<td>文政9年0128</td>
<td>牧での碇泊について。</td>
<td>往路</td>
<td>ヨハン・ウィルヘルム・ドスタールレル</td>
<td>東京大学史料編纂所編撰「江戸参府旅行記」</td>
<td>119–120</td>
</tr>
<tr>
<td>18260322</td>
<td>文政9年0517–18</td>
<td>牧に投錨。上陸。</td>
<td>往路</td>
<td>ヨハン・ウィルヘルム・ドスタールレル</td>
<td>東京大学史料編纂所編撰「江戸参府旅行記」</td>
<td>119–120</td>
</tr>
<tr>
<td>18260623</td>
<td>文政9年0518</td>
<td>牧の様子。</td>
<td>往路</td>
<td>ヨハン・ウィルヘルム・ドスタールレル</td>
<td>東京大学史料編纂所編撰「江戸参府旅行記」</td>
<td>119–120</td>
</tr>
<tr>
<td>18260624</td>
<td>文政9年0519</td>
<td>牧を出港。</td>
<td>往路</td>
<td>ヨハン・ウィルヘルム・ドスタールレル</td>
<td>東京大学史料編纂所編撰「江戸参府旅行記」</td>
<td>119–120</td>
</tr>
</tbody>
</table>
【第3図】鞆の町並

福山市鞆の浦歴史民俗資料館『鞆の町並と商家の賑わい～シーサルトも称賛～』特別展鶴まるごと博物館展示図録資料編、2007年所収「文化絵図」をもとに作成。

ときわ目立っている。

(2) 安永三年（1774）の滞在

安永三年は商館長フェイトー行が参府の復路において、鞆に数日間滞在している。「中村家日記」(12) によると、

四月四日申刻頃帰帆、阿蘭陀人甲石二丁以難船。大二及混雑、阿蘭陀人当津江上陸土佐屋各左衛門方江同八日迄宿船作事等至し、

同九日卯上刻出帆

と四月四日の申の刻に甲石で遭難し、動きがとれ

なくなり、鞆の浦に上陸している。そして、八日

まで土佐屋各左衛門のところに宿泊して、船の修

理を行い四月九日卯の上刻（午前6時頃）出帆し

ている。

ここでいう甲石は現在の讃ノ石に比定され、鞆

の港から南東へ4.5kmほど離れた場所にある（【第

2図】参照) (13)。
また、商船長フェイトが記した業務日誌である「商船長日記」1776年5月14日（安永三年四月四日）条を見ると、次のように記されている。

（前略）船長が私に夜に航行するのは危険であろうということ。たとえば港に投錨する予定であると話した後、私たちは4時に出帆した。5時半に私たちは岩にぶつかり、そして私たちのパルク船は浸水した。私たちは他の船からの救援を得ようとしたが、しかし役立たなかった。パルク船を浮かばせようとすると、全力を尽くして私たちは水をくみ出さなければならないかった。ついに私たちは船の港に到着した（備前国領内にある）。パルク船は水をくみ出すために再び引き上げられた。直接後に私は4つの穴があることを知らされた。

私たちの船長はここに7時15分まで滞在したが、その間に宿が私たちのために設けられた。私たちが通った通りの家々の正面に提灯がともされていた。オランダ人がこの町を訪れて以来33年になる。私は出島に手紙を書いた。パルク船は可能な限り早く荷下ろしされている。

これにより、午後5時半に岩（鴨ノ石）にぶつかり遭難し、それから船の港に到着し、午後8時15分までの間3時間弱のうちに、宿が決定されている。その宿は当時本陣を務めていた土佐屋であったことが先の「中村家日記」の記録からわかる。

また、船の上陸が約33年ぶりであり、加えて遭難という緊急事態にもかかわらず、この時には順調に宿の手配が行われている点が窺える。

3）文政九年（1826）の寄港

（i）往路

文政九年の参府では復路において船に寄港しているが、往路に通過した際には以下のように記されている16）。

正月参府阿蘭陀人乗船日吉丸沖合通船致候、
尤御縄御役人等船廿七日夜五時半時入津候

ハハ出航之諸之処、風並悪敷雨天夜二相成候
ニ付、當家 libre 縦船、夜七ツ時分出船被致
申候

と一月二七日夜五つ半時から七つまで、中村家の
浜近くに滞船したことがわかる。

また、商船長に随行した医師シーボルトは文政九年一月二十七日付17）で、

今朝早く備後領の南端の阿伏岐嶽を通じた。\n
嶽の上には観音を祭った拝殿があり、カイ

チョウ山の麓の岩の上に建っている。拝殿に

似た寺の塔が遠くから見える。寺と阿伏岐の

村はその近くの湾内にあり、樹木の下はやい

な花崗岩の山に取り囲まれている。船乗り

や旅行者はここて仏前に供え物をさなえ仏

の加護を願うのが常で、供え物は普通十の小

銭（ひとつを一月分として一月分に当たる）

で、信者はそれを小さい丸切に結んで経文

を唱えながら海中に投げる。このおびただし

い供え物を僧侶が運べる漁師が拾い上げ

るのである。

と、阿伏岐観音18）についてケンペル同様、詳細

に記述している。シーボルトは随所でケンベルや

他の人の記録を参照しており、彼に関してもある

程度の予備知識を以て見ていたことは容易に想像

できる。

（ii）復路

（a）寄港と宿決定をめぐる動き

商船長一行の復路での上陸にあたって、船の町
内での宿決定をめぐる一連の動きを文政九年五月
十七日の「中村家日記」17）から引用する。

参府阿蘭陀人帰路乗船日吉丸、十七日筏々
時分、仙酔嶽東詰迄罷下り候ノ付、当所滞泊
手苦漸暗七ツ半時二相撲お迎ニ付、七ツ時分
婦へ隠入申候上、①月番宿老八三郎・同町没
庄三郎御本船へ御用何二参り候候、役人被申
者阿蘭陀人并二御縄御役人休足二揚り度被申
候候、宿之義并二風呂焼呉候様被申二付、②
月番宿老の御陣上杉氏・当家二家之内二宿
可申来候処、両家共種々相談致候へ共、何
分簡閲者賜是主候へ者、御陣三者相当り
不申報与申合一向繋決不致候二付、火急之義
主候へ者月番宿老之義何連にも可申報与御
差図被成下度候、③師番所へ被相何処、④小
頭水野上小渕二様御気次二付、地目附刀柄與
兵衛儀師奉行所へ御訳被成候処、⑤御陣三者相
dり可申由被附付候、⑥右之趣八三郎方申越
候内、不意阿蘭陀人御師御役人揚陸被致候二
付、大昆籍御陣手箋も無之候へ者、八三郎
御番所へ被罫出本陣何連共不相定内、不意蘭
人相揚候間、①無趣此度之義私引受御陣可仕
段被申速、早速手箋被致申候、⑧急二士佐屋
を御役人見分二被成、壹ヶ所於にて者相済不
申由被申候付、御師御師者誓屋仰出候裏門
二階二相動申候御役上下五人・大通詞呪
人・小通詞呪人嘯七人帥御願候付、手箋被
致候事聞人遊女見物質、宿屋築藤へ参遊女二
人候候事、外科蘭人山々を見物致之草木或は
石を拾取候事、寺々町内を見物致事、通範之
事事当町仕構手箋数々有之候へ共繁故略之

蘭人名面
カヒタン
ヨハン。ウィル。ヘルムテ。ステュルレル
歳五十二
役人
ヘンテレキ。ヒュルヘル。同廿武
外科
ヒイソル。ヒリツ。フランスハン。シイホ
ルト。同廿四

蘭人付添役人名面略之
右十八目夜、⑨本船日吉丸御陣へ金子百
正御陣佐様・大通詞小通詞上下七人御時料與
して武朱倉屋、御師佐様風呂料銀壹両被下置
候、⑩謹書月番宿老方御差出申し候、十八

日夜八ツ半時分日吉丸無差出帆致申し候
一方で、商館長スチュルレルと、シーボルトは
それぞれ以下のように記している。

拙訳：本日、館の港の前まで来て、そこで投
錨し、それから（6月22日）私たちは
艦の港内に曳航され、そして午前7時
半に港内に投錨した。そして3人とも
上陸し、終日過ごした（6月23日）
と商館長は非常に簡潔に書き記している（38）。こ
れに対し、シーボルトは『江戸参府紀行』（39）の
中で、

朝、引き舟に引かれて館のみなとはいる。
正午ごろ上陸。大変きれいな町並みで、船の
出入りがあり活気にあふれた町である。{中
略}夕方船にもどり、夜半に三〇隻の引き
舟で港外に出る。

文政九年五月十七日（1826年6月22日）九つ
時（午後12時頃）に商館長らを乗せた日吉丸が仙
酔島東沖へ停泊する。翌十八日（6月23日）満
七つ半（午前5時頃）に館側で漕ぎ船の準備が整
い、「七ツ」（午前4時頃）（38）に港へ漕ぎ入れ
商館長一行によると午前7時頃に港内に投錨した。
そして終日過ごした後、夕方には船に戻り、夜八
半（午前3時頃）に出帆している。

この間について、宿決めに注目しながら館の町
内と商館長一行の動きをまとめていくことにする。

まず①月番宿老の土佐屋八三郎が町代五郎を
伴って本船へ伺いに行き、宿、風呂、休息を要請
される。②八三郎は本陣を務めていた上杉家、中
村家に宿などの件を打診する。しかしながら両家
の話し合いでは「何分簡閲者賜是主」であるため
本陣に相当しないとの結論に達している。このこ
toを受けて、③八三郎が宿をどこに决定すべきか
を番所へ問い合わせを行っている。番所では当時
病身であった小頭水野上小渕の代わりに地目附
刀柄と兵衛が航奉行所へ伺っている（4）。そし
tて奉行所による決定は組線部⑤「御陣相当」る
とのことであった。この旨、番所から申渡がある
ものの、⑥宿が決定していない。そうしている内に、「不意阿蘭陀人御厳御役人揚陸使致候」と、オランダ人が船に上陸している。これは正午頃の出来事である。⑦「無撓此度之義私引受御宿可仕段被申達」と「私」八三郎に宿を受け入れるように達したがあった。この達しにより役人が突然、土佐屋を見分し、一ヶ所だけでは不十分だとして、「御検役」たちのための宿が猫屋に決定されている。

この後、商館長一行は籠藤にて遊女見物をしている。彼らが船に戻った後、夜に日吉丸から本陣へ膳料として二尺一厘、風呂料銀一両下され、代金支払いが行われた (8)。談取書は月番宿から提出されている (9)。

さて、宿決定までをもう一度確認しよう。

はじめに船から御用を伺った月番宿老、土佐屋八三郎が本陣（上杉家、中村家）に付け合っている。しかし、その時に宿が決定しなかったため、八三郎は番所へ行き問い合わせを行っている。そこで、番所の役人が奉行所へ赴き、宿は本陣に相当する旨を決定している。ところが、宿が決まらずにうち商館長らが上陸したため、宿が月番宿老八三郎に決定され、手足を整えるように申渡されている、そして役人が土佐屋を見分し、付添の役人たちのための宿（猫屋）が探されている。

オランダ商館長一行は町方の責任において接待され (21)、月番宿老が市の手配など、商館長一行と町側の調整役にあたっている。本来ならば、月番宿老が本陣に打診した時に宿が決定し、準備が整えられたと考えられる。今回は本陣が申し入れに難色を示しており、このような調整が必要な場合には、番所を通して斡旋して奉行所に伺いをたてて、奉行所の判断を仰ぐ形となっている。つまり、斡旋内での折り合いをつける役目も加わっていたのである。

ところで、斡旋の町の行政 (22) は斡旋の支配下にあり、七カ町（原町、鍛冶町、石井町、関町、道越町、西町、江浦町）の町ごとに宿老1名、月行司1名、町代1名を置いており、各町宿老から月番宿老が出されていた。文政九年当時、斡旋は井上久実が、土佐屋は道越町宿老、大坂屋は関町宿老、中村家（保命酒屋）は西町宿老を務めている。ただ、商館長一行が来航した頃には西町宿老は父吉兵衛から関町宿老上杉平左衛門兼従となっており、その後後藤が西町宿老に就任している (23)。この一件で土佐屋に宿を命じられたのは、彼が月番宿老であったから、というよりむしろ本陣の一つであったことによると思われる。

(b) 上杉・中村両家の対応の背景

上杉・中村両家のオランダ人寄港事件で示した態度の背景についてもく外国人寄港の例である漂着民回航の際の扱いから考察していこうにしたい。以下は文政九年三月二九日付の「中村家日記」 (24) である。

一若風波二面異国人揚陸之節者用意宿囲富寺・南禅坊へ申付置候問、揚陸より宿迄道案内之者武人宛可指事

異国人御厳御役人若揚陸も有之候事も難計用意宿之事

本家 大坂屋
保命酒屋
土佐屋
下宿 梳居屋
伊九老
高松屋
仁左衛門
右者町役所二面申候候先例有之二付て月番宿老方申渡候
右之外異国人通船二付被仰出候事数々有之候得共略之

これは、異国人（漂着民）が長崎護送の途中に観の港に立ち寄り、上陸する場合を想定して記されており、異国人は国富寺、南禅坊を宿として提供し、揚陸場から宿まで道案内の者2人ずつを出すことになっている。また、御厳御役人は本陣
である。本家大坂屋（上杉家）、保命酒屋（中村家）、土佐屋、及び「下宿」弥屋（猫屋）、高松屋に宿泊させる旨が記されている。この件は文政九月四日に「異国人通船無滞相済」25と圃に
は寄港せずに落ち着いている。

ここから2つの点を指摘しておきたい。一点目は港町として、漂着民も寄港する可能性があり、そのため受入体制を整え、万が一の場合には滞りなくその体制を機能させる必要があった点である。

二点目は同年五月にオランダ商館長たちが来訪した時、宿決定のために本家大坂屋、保命酒屋、土佐屋、猫屋の順で打診が行われている点である。

ここに記されているのは単に本陣や下宿ではなく、舎町内での彼らの勢力図を示していたと思われる。

以上のように、異国人の受け入れの際にはことを順調に進めなければならず、上杉・中村両家は単に「何分陸人者賈業者」という理由のみで商館長一行の受け入れに難色を示したとは考えにくい。

では彼らの対応の背景には何があったのか。

一つは先の申渡が商館長スチュールレル一行が駆に寄港するわずか一月半前の文政九年三月末であり、異国人（漂着民）は町内を巡るため、そして御親役人は本陣で、というこの申渡と同様の方針を上杉・中村両家は踏襲しようとしたのではないかと考えられる。実際、5年前の文政四年（1821）三月三日には紀州熊野に漂着した異国船を長崎へ移送する際に、町へ入鈷し、御親役人たちは本陣である中村家の隠居所（朝宗寺）にて暫く休息し、同家では「家製名酒」を差し出している30。このような先例もあり、上杉・中村両家がオランダ人止宿を渋った背景の一つとなったと考えられ

もう一つはその規模にあると思われる。それぞれの外国人使節の規模を比較すると朝鮮通信使が700－800人（通信使400－500人、案内役や対馬宗氏一行300人ほど）、琉球使節が100人前後と島津氏一行であったのにに対し、オランダ商館長一行は商館長ら3名（かつては4名）と付添役人で、全体でも60人ほどの規模であったという27。そして実際に上陸して宿で休息する人数となると、文政九月の例では商館長等3名と付添役人7名の計10名であった。彼らをもてなす手間と本陣への突入といったように、周囲実質的な問題もあったのではと考えられるが、数値的な裏付けを得られないので、実際のところは分からない。

さらに、「諸国は勿論阿蘭陀人・琉球人江も銘酒売弘メ」28（文化十年（1813）、十二月、「ここに蘭人・琉球人など入津之類也数著入人相成候儀も度々有之、近来は對馬・長崎の筋より少々異国人之注文も有之」29（弘化五年（1848）、四月）中村家の顧客としての外国人に対しては特に抵抗があるようには見受けられない。

(c) シーボルトの行動と町並の観察

以下では、先の史料で「外科蘭人が々々を見物致之草木を拾取候事、寺町内を見物致」と述べているシーボルトの町内での行動と町並の観察の記録を紹介することにしたい30。

われわれは何軒かの家を訪ねたが、心から迎えてくれた。ある寺へも行ったが、その場所は美しさとひらけた眺望で有名であったし、また遠隔して日本の海岸に吹き流され

町郊外の小高い丘にある医王寺に行き、寺の背
比較日本学教育研究センター研究年報 第6号

面にある山を登って、植物・昆虫の観察を行っていた。また、美しさと眺望や揺動した朝鮮人が滞在したで有名な「ある寺」については福福寺か円福寺の二寺院が考えられる。これらの寺は陸の東側の海に面しており、手前に仙酔島を見む。そのうち、福福寺は朝鮮通信使の正使が滞在した場所である。その客殿である対橋楼からは朝鮮通信使から「日東第一形勝」と評され、また千島や小瀬旭などが見栄えされた眺望を楽しむことができる①。

先に述べたように漂着民を長崎へ回航するにあたって、船に寄港することがあり、その際に漂着民の宿坊とされていたのが園福寺である。同寺は商館長一行が遊物を見物するために訪れた籠藤から目と鼻の先にある。この寺の裏手に回ると福福寺と同様の仙酔島の絶景を臨むことができる。

前夜であるなら彼の若千の雄辯いらっしゃるが、何れにしろ対岸に仙酔島が見える風景を見ていたことはいえるであろう。

また、シーボルトは両の町の様子を以下のように書き記している。

たくさんの小売店があるが、大部分は船員用の品物や篠・織物、草鞋などの製品である。東北の側にある港は、概して小さい日本の船には都合のよい停泊地で、北側にはいたる頑丈な堤防、西南の側は町と高い山があって港を守っている。港外は三河の深さであるが、港内はもっと浅く、私が考えではヨーロッパの船は入港できない。けれども約半マイル離れた所に同じような好条件で船を降ろすことができ、町の長さは一五町で手入れの行き届いた住居は裕福なことを物語っており、住民は数人上るようである。

ここで触れられているたくさんの小売店がある通りは町の要所（土佐屋側と医王寺の方面）を通る【第3図】に書き入れた矢印部分と思われる。

もちろん、このような町並の記録は極に限らず、シーボルトは各停泊地や実際に上陸した町について、見物した場所や時に機器を用いて観測したデータなど、彼の興味関心に即して様々な事項を書き残している②。

おわりに

参府の記録の中で、両の町の様子を知りうるものは少ないが、ケンペルやシーボルトは詳細に港や町並み、寺院について記している。また、彼らの記録からは宿について特に気にしている様子は見られない。

船は港町として、外国人使節や漂着民護送船が寄港する可能性があり、それに伴う受け入れ体制が整備されていたと考えられる。オランダ商館長一行の船への寄港に伴う宿は、安永三年（1774）の事例では船の運転という緊急事態にもかかわらず、特に大きな問題もなく決定されている。一方で、文政九年（1826）の一件は宿決定までの手続きを通じて、両の町の指揮系統の一端を露呈することになった。すなわち、商館長一行の船での宿は本来なら月番宿者が本陣に掛け合い決定されていたが、そうでない場合には番所を通じて船奉行所へ伺いをたてることになっていた。

最後に文政九年の船の寄港件から浮かび上がった課題を2点提示しておきたい。一つは宿所の決定や接待の際の町役人らの行動に見られる商館長らの受け入れ体制（宿舎の決定、接待の際の町役人らの動き）と朝鮮通使や琉球使節、諸大名の寄港時の体制との共通点、相反点である。

二点目は商館長らの宿を決定する際の本陣上杉・村中両家が示した態度と両家が町内における影響力の大きさである。先に両家が「篤人者賜者」とした背景について見通しを述べた。ただ、月番宿老による打診と船奉行所からの判断があったにかかわらず、上杉家・村中家の意向が尊重された形となっている点は町内の構造を今後検討していくうえでも注目されると考えている。
注
（1） 福山市史編纂会編『福山市史』中巻、1968年。
（2） 福山市籍の浦歴史民俗資料館の会編『朝鮮通信使と福山藩・穂の津』その1（慶長・天和）、その2（正徳・文化期）、福山市籍の浦歴史民俗資料館活動推進協議会、2003—2004年。および青野春水他編『穂の歴史民俗資料館活動推進協議会』、2006—2009年。福山市籍の浦歴史民俗資料館編『知られざる琉球使節―国際都市穂の浦―』2006年。福山市籍の浦歴史民俗資料館編『穂の町並と商家の版見い―シーボルトも称賛―』特別展版をまるごと博物館展示図録資料編、2007年。
（3） 姜在彦『朝鮮通信使が見た日本』明石書店、2002年。辛基秀『朝鮮通信使の旅記』PHP新書、2002年。佐竹敏『近世穂内海における“国際経験”』（岸田雄編『中国地域と対外関係』山川出版社、2003年）、『福山市史』中巻、665—666頁。
（4） 福山市教育委員会編『穂の町並』1974年。
（5） 『福山市史』中巻、670頁。横山学『琉球使節の往来』（福山市籍の浦歴史民俗資料館編『知られざる琉球使節―国際都市穂の浦―』2006年）。
（6） 『中村家日記』（原田伴彦編『日本都市生活史料集成』七、港町編Ⅱ、文彩社、1976年、390頁。）
（7） 『中村家日記』（『日本都市生活史料集成』七、港町編Ⅱ、402頁。）
（8） 史学会編『東西交渉史論』上巻、東京大学出版会、1939年。金井園『日韓交渉史の研究』思文閣出版、1986年。片桐一男『オランダ商館長とシーボルトの江戸参府』（石山真一他編『新シーボルト研究』Ⅱ、社会・文化・芸術編、八坂書房、2003年）。同『カビタンの江戸参府と穂』（福山市籍の浦歴史民俗資料館編『穂の町並と商家の版見い―シーボルトも称賛―』特別展版をまるごと博物館展示図録資料編、2007年）。
（9） 福井毅『『江戸行一件書留』について』（福山市籍の浦歴史民俗資料館編『穂の町並と商家の版見い―シーボルトも称賛―』特別展版をまるごと博物館展示図録資料編、2007年。）
（10） エンゲルベルト・ケンペル著・斎藤信訳『江戸参府旅行記』平凡社、1977年、103—105頁。
（11） 『江戸参府旅行記』234—235頁。
（12） 『中村家日記』自宝暦十一年至安永八年（福山市籍の浦歴史民俗資料館寄託文書）。
（13） 海図で示される「島」は「国連海洋法条約第121条」によると、自然に形成された陸地であって、水に囲まれて高潮時、すなわち満潮が頂点に達した時においても水面以上にあるものであり、鴨ノ石は満潮時には海面に隠れる。「島未満」の場所といえよう。鴨ノ石には現在、灯台が設置されている（現在の標高は7.6m）。なお、1774年5月14日当日の潮汐推算（福山）によると、潮高は17時112cm、18時65cmとなっていた。
（14） 『中村家日記』（文政九年一月二十七日、福山市籍の浦歴史民俗資料館寄託文書）。
（15） フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト著・斎藤信訳『江戸参府紀行』平凡社、1967年、119—120頁。
（16） なお阿伏賀地方には、文化元年（1804）五代藩主阿部正精、文政九年（1826）六代藩主阿部正寧が畑巡検で訪れしており、広義には穂に含めて考えるべきだと思われる（神田由篤『近世穂の浦をめぐる流通と社会構造』『歴史科学』第194号、2008年）。
（17） 『中村家日記』文政九年（福山市籍の浦歴史民俗資料館寄託文書）。
（18） 『商館長日記』1826年6月22日、33日（東京大学史料編纂所『寫真帳7598—75—43・44』）。
（19） 『江戸参府紀行』250頁。
（20） 時間的に矛盾が生じるため、「六つ」（午前6時頃）の誤りかと思われる。
（21） 『福山市史』中巻、672頁。
（22） 『福山市史』中巻、70頁。
（23） 『中村家日記』文政九年（『日本都市生活史料集成』七、港町編Ⅱ、469—470頁）。
（24） 『中村家日記』文政九年（福山市籍の浦歴史民俗資料館寄託文書）。
（25） 『中村家日記』文政九年（福山市籍の浦歴史民俗資料館寄託文書）。及び『中村家日記』（『日本都市生活史料集成』七、港町編Ⅱ、470頁）。　
（26） 『中村家日記』文政四年（福山市籍の浦歴史民俗資料館寄託文書）。
（27） 片桐一男『オランダ商館長とシーボルトの江戸参府』。同『カビタンの江戸参府と穂』。
（28） 『中村家日記』文化十年、十二月（『日本都市生活史料集成』七、港町編Ⅱ、436頁）。
（29） 『中村家日記』弘化五年、四月（『日本都市生活史料集成』七、港町編Ⅱ、26頁）。
（30） 『江戸参府紀行』250頁。
（31） 『中村家日記』（『日本都市生活史料集成』七、港町編Ⅱ、481頁）。
（32） 例えば下関藩在の記述などが挙げられる（『江戸参府紀行』90—91頁）。

Note